

2023年11月12日（日）、立命館大学朱雀キャンパスにおいて、2023年度立命館学校教育研究会総会・秋季大会が開催されました。コロナ禍を経て、4年ぶりの対面開催となり、あわせてZoomでの配信も行いました。校友教員の方をはじめとして、立命館大学の学生や大学院生、教育委員会関係者の方々など幅広い職種・年代の方に対面とオンラインで70名ご参加いただきました。

総会では、上山義宏会長の本大会開催にあたってのご挨拶のあと、「2023年度立命館大学学校教育研究会運営委員体制」について報告があり、承認されました。続いて井上雅彦副会長より、「2022年度立命館学校教育研究会事業報告ならびに2023年度立命館学校教育研究会事業計画」について報告があり、承認されました。最後に川那部隆司委員（立命館大学教職教育センター長）から2023年度に実施された教員採用試験の傾向や本学学生の受験結果等について報告がありました。

総会後に開催された分科会では、学校現場において関心の高い4つのテーマを設定し、参加者各々が興味・関心のある分科会を選び、講演を聞いたあと、講師の方を中心に熱心に議論をしました。詳細については、以下にまとめておりますので、ご参照ください。



分科会終了後は、茶話会を開催し、講師の先生方や幅広い年代の参加者が親睦を深める貴重な機会となりました。

第1分科会

「若手教員しゃべり場 ～現場で感じたことから～」

コッパネーター：井上 政嗣 氏（雲雀丘学園小学校 教諭）
溝淵 誠太郎 氏（箕面市立萱野小学校 教諭）

第1分科会は、教員経験13年目・20年目の中堅教員とこれから教員をめざす学生、そして以前教職支援センターに勤務されていた教員といった多彩な参加者で交流ができました。



「教員志望者の減少」の話題から始まり、学校現場に勤務している参加者から、学校現場の多忙さという話題に展開しましたが、それを上回る「教員のやりがい」「教職の醍醐味」が学校現場にはあるという声や、「ブラックな職業」というイメージが強調され残念だという思いも多く出されました。教員をめざす立場で参加した学生の「自分自身の学校経験において、先生はあこがれをもつ身近な大人であり、自然と教員をめざすようになった」という声に、ロールモデルとなる存在の大切さが確認され、「そういう意味において、若い先生を育てるのも教師集団であり、自分たち教員である」というように話がつながっていきました。後半は、「自分たちで働き方を変えていこう」という内容に

話し合いが進みました。やらないといけないことは多いが引き算の考えで省力化できるものを探していくことや個人で取り組むのではなく教員同士がつながる「チーム学校」として取り組んでいくことが重要との意見が出ました。「働き方を変えていける！」という積極的な姿勢と自分を大事にして多様なライフスタイルで教員生活を続けていく考えも示されました。

明日からの実践に力を得て、またこれからの教員の在り方を考えることのできた有意義な分科会でした。

第2分科会

「教育現場と博物館をつなぐ ～博学連携の入り口と出口～」

講師：佐藤 稜介 氏（京都府京都文化博物館 学芸員）

コーディネーター：平岡 信之 氏（京都教育大学附属桃山小学校 教諭）

第2分科会は、対面とオンラインで10名を超える参加者がありました。

はじめに、博物館と学校が連携し、望ましいかたちで子どもたちの教育を推し進める活動である「博学連携」の位置づけについてお話しいただきました。博学連携は、一部の意欲的な教員、あるいは学芸員の個人的な取り組みで行われているものではなく、教育基本法や博物館法等の法令や学習指導要領でも推奨されている取り組みであるということをご説明いただきました。

続いて、学芸員の方の普段の業務や学校教育を受け入れる体制、実際に提供されているプログラム等について、京都文化博物館と奈良国立博物館を中心に、ご自身の取り組みも含めて、さまざまな博学連携の実例をご紹介いただきました。また、施設側の受け入れ体制は千差万別だが、博一学のミスマッチは、HPを少し調べてみる

等のわずかな努力で減じることができるというお考えをうかがいました。

最後に、博物館側が子どもたちに何を伝えたいか、何を考えさせたいかということをご説明いただきました。そして、学校側が博物館に何を求めているかという点について、参加者からも意見を出していただき、活発な意見交換が行われました。

博学連携を進めるにあたって、「十分な打ち合わせ」や「外部人材に依存しすぎないようにすること」などを通して、博一学の不幸なミスマッチが生じないようにすることの重要性にあらためて気づかせていただく貴重な機会となりました。



第3分科会

「それ、探究してるの先生ですよね？」

～なぜ総合学習は「調べ学習」の域をぬけだせなかったのか～

講師：田辺 記子 氏（立命館守山中学校・高等学校 教諭）

コーディネーター：井上 雅彦 氏（立命館大学大学院教職研究科 研究科長）

第3分科会は対面参加13名、オンライン参加5名の合計18名が参加して実施されました。主な発表内容は以下の通りです。

発表者の田辺先生は自校で取り組まれていた探究学習の実践課題を解決しながら、学校独自の教科である「共創探究科」の3年間のカリキュラムをデザインされました。

「共創探究科」では「質の高い探究」授業を展開するために下記の3要件と5つの仕掛けを考え、プログラムを実践されています。

- 3要件
- 1 リアルな社会と関わる
 - 2 「探究のプロセス」を早く・多く回す
 - 3 「お膳立て」型授業から{FB重視}型授業への転換を図る

5つの仕掛け

- 1 「社会課題を解決する」という大題目の設定
- 2 生徒のセルフマネジメントによるフィールドワークの実施
- 3 「まとめ・表現」を増やし、適切な「課題の設定」へ導く
- 4 調査手法の講義をしない
- 5 教師は初めから無理そうだと思う生徒の主體的な活動を止めない

生徒の探究活動の多くの事例を紹介いただき、生徒自身の興味関心と社会課題を結びつけ、フィールドワークや様々な活動を通じて探究を深めており、質の高い実践が行われている様子が伝わりました。生徒が自分たちの研究にあったコンテストへ応募し、外部評価を受けることも推奨され、多くの受賞者を輩出しています。さらに、自らの探究活動が大学の学部学科選びのきっかけとなっており、高大接続という観点からも大いに参考になりました。

質疑応答では、自分で課題設定ができない生徒への対応や5教科とのバランスの問題が取り上げられたが、この授業では課題設定ができない生徒がいないことや、ア

ウトプットにこだわった授業実践を行っておられ、学校の強みと弱みを考えて実践すれば良いとお話されました。

探究学習をどのように進めていくか各学校で模索している中、参加者が今後の実践に生かせる内容が多く得られた分科会となりました。



第4分科会

「特別支援教育」は「インクルーシブ教育」へと展開できるのか」

講師：村田 観弥 氏（立命館大学産業社会学部 准教授）

コーディネーター：神藤 貴昭 氏（立命館大学大学院教職研究科 副研究科長）

第4分科会では、立命館大学産業社会学部の村田観弥准教授を講師としてお招きしました。

まず初めに、お話の基準となる「障害」の主な見方（「医学モデル」と「社会モデル」）について具体例を挙げながら説明をいただきました。

2014年には、障害者権利条約を批准し、日本政府は国連に報告書を提出しました。このことについて、特別支援教育における国連からの勧告があり、文部科学省は、特別支援学校および通級による指導の適切な運用について（通知）（令和4年4月27日付け）をおこ

ない、インクルーシブ教育を推進するものとして通知しました。一方で、現場では、学級編成の標準の数により教員の実数が減少したり支援員が不足したりしている現状が問題であるとしてお話をされました。

合理的配慮については、基礎的環境整備との違いを説明し、何が合理的配慮になるのかについてお話をされました。加えて平等や公平とは、構造的なバリアが取り除かれ、全員が平等かつ公平な機会を保持している状態であり教育がその方向性に向かうべきであると説明されました。

最後に、現在の特別支援教育とインクルーシブ教育は、「医学モデル」・「方法論が問題の焦点」であり、インクルーシブ教育「社会モデル」・「権利の回復が問題の焦点」としているため転換が必要であり、インクルーシブ教育に展開するためには、人員や金銭的な支援、環境の変化（転換）が必要な理由などを解説され、分科会を閉じました。

